

【書籍紹介】

『近世庶民の日常食―百姓は米を食べられなかったか―』

有蘭正一郎著



二〇〇七年発行 A5判 219頁  
定価一八〇〇円十税 海青社

本書は、近世から近代に生きた、名もない庶民（我々の先祖たち）が日頃食べていた飯の内容について記述した本です。私がこのテーマに十年あまり取り組んで得た結論は「庶民は地産した食材群をうまく組み合わせ、賢く地消していたので、日常食の内容は地域ごとにかなり異なる」米を食べるのが豊かな食生活であるとの単系列的な視点は間違っている」

の二つです。

本書には民具に関わる記述はまったくありませんが、読者諸兄の研究に資するところがあれば、さいわいです。

章立ては次のとおりです。

- 第1章 庶民の日常食研究の資料
- 第2章 近世後半の百姓の日常食
- 第3章 近代初期の滋賀県民の日常食
- 第4章 近代初期の伊賀国庶民の日常食
- 第5章 近代の山形県と秋田県庶民の日常食

- 第6章 近世後半以降の信濃国庶民の日常食
- 第7章 西南日本3地域のサツマイモ食普及と人口増加

- 第8章 九州大村藩領の村人の日常食
- 第9章 沖縄島翁長村の19世紀後半の土地利用と日常食

- 第10章 ナスとダイコンの故郷
- 第11章 肥桶がとりもつ都市と近郊農村

との縁  
第1章と第2章は、本書の総論部です。

第1章では本書のテーマを解明できそうな資料名と諸資料の信頼度について記述

しました。また、近代初期の統計資料を使って、近世までの国ごとに庶民の主食

材の構成比を図と表に示しました。日本の平均では米がほぼ半分を占めていたの

ですが、国ごとの違いが大きくて、平均値は合計して割っただけの意味しか持ちません。図をご覧ください。右端が全国平均値、棒ひとつがひとつの国です。全国平均値と似た構成比の国はほとんどな

く、「所変われば品変わる」の状況だったことがお解りいただけると思います。

第2章ではお百姓たちが本音を記述した文書を使って、「百姓は米を食べられなかったか」を検討し、資料が得られた地域についていえる、お百姓たちは結構米が入った飯を大食いして、エネルギーとたんぱく質を摂取していたことを記述

しました。

第3〜5章は日常食材の八〜九割が米だった地域についての記述です。山形県

と秋田県の庶民がほぼ米だけを日常食べていたことは不思議に思われるかもしれないが、ここは米しか穫れない自然環境の地域であって、今もこの性格は変わりません。

第6章は米のほかに麦などの雑穀を作り、穀粒を飯または粥に炊いて食べるほか、粉に挽いた食材を「こがし・麵・焼き餅」など、様々に調理して食べていた地域の例です。

第7〜9章はサツマイモの構成比が高かった地域の日常食の記述です。一七〜一八世紀に西南日本の食材として普及したサツマイモの長所は、単位面積当り収穫量が多くて、多数の人口を養えること、短所は単位重量当りのたんばく質の含有量が少なく、ほかの食材でたんばく質を補わねばならないことです。そこで西南日本の庶民はサツマイモにミソとイワシ類を組み合わせて、栄養のバランスをとる食体系を創りあげました。古来あった穀物とミソに加えて、南から伝わった

サツマイモと、東から伝わったイワシ類を網で獲る漁法が九州で出会い、新たな日常食材になったのです。近世後半の日本の人口はほとんど変わらなかったとされていますが、この食体系が普及した西  
南日本の国々では、人口が二〇%以上増えています。

今の日本で食べている野菜の大半は他所から持ち込まれたものの子孫です。第10章は食材のひとつである野菜の栽培起源地を降水の季節との関わりで説明した章です。

食べたら出ます。第11章は糞尿と農産物（食材）が限りなく循環して、都市と農村が助け合っていた時代の話です。

各章の合間に、それぞれの章を読むのに役立ちそうな「話の小箱」六つを挟んであります。食べてばかりいると飽きるので、箸休めのひとときです。食べ飽きたら「話の小箱」を開いていただければさいわいです。

(有蘭正一郎)

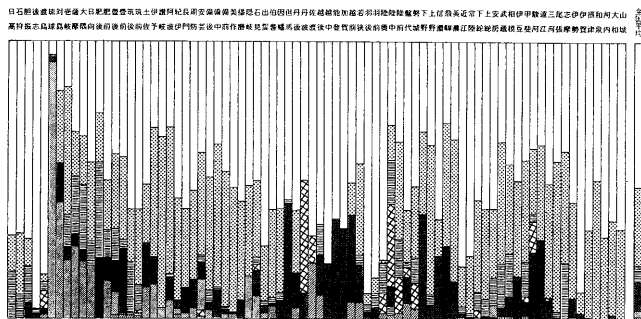


図1-1 「人民常食種類比例」にみる日常食材の国別構成比

『日本近代の食事調査資料』の21頁の図を複写し、筆者が右端に全国平均値を加筆した。